

教育について学ぶ

—その2—

山本哲朗

要旨

周知のように、国家百年の計と言われるぐらい教育改革は難しい。安倍政権下で教育基本法の改革は行われたが、児童や生徒に対する教育法は確立されているとは思えない。そのため教育法・教育学に関する書籍・定刊物は夥しい数が発行されている。前論文¹⁾で記述したように、教育学を専攻した教員は別として、大学の教員の多くは教育学について学ぶ機会は少なかったはずであり、教育や授業に関する知識や知恵を学ぶことが大切であると考え、教育に関する書籍を紹介した。本論文でも引き続き、最近読んだ教育、授業、勉強に関する書籍を紹介するとともに、執筆者の意見に自分の考えを若干述べた。

キーワード

大学全入，教育改革，学力低下，教員意識，読書

1. まえがき

国による学校に対する管理体制を強化する教育関連3法案は2007年6月20日に成立した。学校の教員組織を「ピラミッド型」に転換し、教員免許法改正案では、教員に10年ごとに講習を義務づけ、不適格教員を排除することになる。改正教育法の理念に沿った学校教育法改正案では、小中学校の目標に「わが国と郷土を愛する態度を養う」が盛り込まれている。さらに、授業時間数等、学習指導要領の改正も必然だと著者は思う。ゆとり教育に厳しい批判の眼が向けられており、その改善が希求されるであろう。著者は先の論文¹⁾において教育に関わる書籍・定刊雑誌等から得た教育論を紹介するとともに、それに対する意見を述べた。本文はその後に読んだ主に教育に関する書籍から著者の特に言及したい点を引用し、それについて筆者の意思や考えを述べ

ている。引用部は“ ”を用いて表示した。
なお、著者の敬称は省略させていただいた。

2. 国語のできる子どもを育てる²⁾

本書の構成は第一章書くこと、第二章読むこと、第三章読解力とは何か—学童期における読解能力と能力判定の問題となっている。大学教育では、多くの学生が書くこと、読むことを煩わしく思っている。一例として、学生掲示板の掲示文をメモするのではなく、携帯電話を使い写真として収めている。講義も板書書きが減り、視覚に訴える講義が良いかのような錯覚に陥り、パワーポイントを使った講義が横行している。

著者は「書くことの意味」について、“すでに知っている知識や情報の断片を新しく組み合わせて、つまりいったん空間に定着してさらに「考えること」で、まったく新しい知

識や情報を生み出すことができるということです。...以上をまとめてみると、書くことには「考える」ことを可能にするという働きがあります³⁾。「学校での読みの現状 薄い教科書と退屈な授業」について記述された以下の著者の考えに筆者はもる手を挙げて賛同する。「そもそも文章を読んでいく時、なぜいちいち分かったかどうか確認されねばならないのでしょうか。その文章が分かり、興味深い内容ならば、少々飛ばし読みであれ、分からない部分があれば、どんどん読んでいくのが当たり前であり、それが私たち大人の通常の読書活動、言語活動になっているはず⁴⁾。」

読解力については、「本は読めるが読解問題はできない、とその逆のケース、読解力はあるが本が読めない場合を引用して、成長や発達の途上にある子どもの場合、「好き」からメタレベルの認識にいたる発達のプロセスを考慮した指導という教育の観点がどうしても必要ではないかということ、そして、読解力を測るというが、はたして測定装置としての読解問題には何も問題はないということの二つです。現行の指導とテストは、言語処理を言語処理そのもので指導し、計るというようなことをやっていて、あまりにも工夫が足りません。...つまり、本が読めるし、読解問題もできるという国語の指導は、いかにすればできるだろうかということ⁵⁾。「筆者は本が読めれば大学生の講義の読解力が醸成されると常々思っており、読書することを大学生に勧めてきたが、この著者の考え方から改めて読書と読解力を身につけて教科書の内容をより深く理解させねばならないと痛感する。

3. 教育不信と教育依存の時代⁶⁾

著者は東京大学大学院教育学研究科の広田照幸教授である。専攻は、教育社会学・社会

史である。青少年の学校離れについて次のように記している。「子供たちの学校離れは確実に進行しています。勉強する意欲がどんどん低下している。家庭での学習時間というのは世界的に見てもどんどん下の方になりつつあります。非常に低いレベルで。一昔前と違って学校の外に楽しいことがいっぱいありますから、子供たちは家庭と学校の往復ではなく、もっと違う所で自分探しをしている。かつてのような、「ともかく一生懸命勉強しないと今の生活から抜け出せない」というハングリーな動機は消えて、「むしろ、今の生活から抜け出したくない」と思うようにすらなっています。「いろんなことを楽しめるのは今しかない」と勉強よりも別のことに熱心になっている。...私は今の日本の学校の先生がたを、全体としてけっこう評価しています。質は高い。...子供たちの「学校離れ」は、現代の教育における重要な問題です。ただし、それは、教育基本法をつついて、理念や目的を別のもにすれば改善される、といった性質の問題ではありません。ましてや、学校でいろんな徳目を教えれば何とかなるといった問題ではありません。教育政策としてできることは、先生の数を増やすとか、カリキュラムを組み替えて理解度を高める工夫をするとか、そういったレベルの問題だと思えます⁷⁾。」このような子供たちがどんどん大学に入学する以前に、真に生徒自らが学習する意識を高めるような教育政策がぜひとも必要であると筆者は言いたい。

「時間」コストに配慮した大学改革において、著者は言う。「もし、教育研究に関して知の生産性を高めようと真剣に考えるならば、どんな改革案も、時間コストへの配慮と抱き合わせで提案される必要がある。アウトソーシングには限界があるにせよ、たとえば、「自己点検・自己評価をやれ」というのであれば、恒常的に情報を収集したり、取りまとめたりするような、専門のスタッフやセク

ションを作って欲しい⁸⁾。”本当にわれわれ教員の毎日は教育・研究以外に割かれる時間が目だって増えてきており、落ちていて文献や書物を読む時間がない状況にある、と感じているのは筆者だけではあるまい。物品の購入や出張に関わる資料作成等に要する労は教育・研究面で何らかの付加価値とはなり得ない。

4. 教育力⁹⁾

本著者からは教育はもちろん、読書、コミュニケーション等、教えられることが多々ある。序章の「教えること、学ぶこと」において、“「子どもの個性を伸ばす」というスローガンはもっともらしく聞こえる。しかし、教師自身が何か高みを目指して飛ぶ矢のような勢いを持っていなければ、学ぶ側に「あこがれ」は生まれにくい。教えるという行為にばかり気をとられて、教師自身が学ぶことを忘れていく場合が少なくない。学ぶ側はそれなりに進歩しているにもかかわらず、教師の側が十年一日の如くであるとするならば、年々若さが失われる分、教師の魅力は減っていく。学び続けていると、人は若くいられる。…私は大学の教職課程で、教員志願者に授業をしている。教師になりたいという学生たちが集うわけだが、そのうちの半数以上は大学入試時に読書の習慣がない。少なくとも人に何かを教える職業に就きたいと思っているのならば、読書の習慣は最低限必要だ。自分自身が本を読まず学んでいないのに、教えたがるとすれば、それは本末転倒だ。学ぶことのプロフェッショナルであるからこそ、教える側に立つことができるのだ¹⁰⁾。“筆者もこの点は首肯し、限られた授業時間ではあるが、自然科学分野での新しい発見や伝承すべき科学者を学生に伝授することは彼らに新鮮な感動を与える上で極めて大切であると信じている。そのために、日頃から関連する書物や雑誌に

目をよく通し、その内容を学生に教えるように心がけている。

「発問力」に関して、“教育の基本はテキスト（教材）と問いである。内容の濃いテキストを生徒に出会わせ、そこに問いを投げかけテキストから吸収を良くさせる。物事を考えるためには、考える切り口が必要だ。…教師の実力が問われる勝負どころは、発問力である。問いがぼんやりした凡庸なものであるならば、生徒たちは深く考えることができない。問いを発するという行為は、実に教育者らしい行為なのである¹¹⁾。”しかしながら、現状では筆者の担当する選択必須講義で指定したテキストを購入しない学生が約20%もあり、非常に憂慮している。すなわち、内容の濃いテキストと学生との出会いの場が閉ざされている。この点は大学教育上の問題として、対応策を早急に模索すべきだ。

「教育力の基本とは」で、“教育という仕事ははかない”と斎藤喜博はよく言っていた。斎藤喜博というのは、昭和を代表する小学校の校長で、情熱にあふれた実践者だ。いろいろな教育方法を工夫して、教育学研究の潮流をつくった人である。その人が「教育とは、はかない仕事だ」と言ったのだ。はかないというのは、ものとして残らない、相手に感謝されるとは限らない、むしろ嫌われたりする、意図が伝わらない、といった様々なさみしさを一言にした表現だ¹²⁾。“教師の指導力が声高に言われている現在、「教育とは、ますます、はかない仕事だ」といっても過言ではない、と筆者は思うことがある。すなわち、筆者の教育への思い熱意が学生諸君に伝わらないことに空しくなる。

最終章9章「ノートの本質、プリントの役割」のなかで、“学校はなぜあるのかということ、もちろん団体生活をするという社会的なルールを身につける場所でもあるが、本来、知的好奇心を中心にして、勉強する仲間が集まるところなのだ。それが象徴的に現れるの

が読書活動であって、読書を全くしないで学校の成績向上だけの追求という、やはり、知的好奇心が育っていないと見ざるを得ない。社会に出て一番大事なのは知的な好奇心や欲求、向上心というものだが、そういうものの種が読書によって播かれ、育っている。そのことによって学校が嫌な場所でなくなるのだ¹³⁾。”平成19年度の授業では、毎回、ある本を2～4ページコピーして、学生に読んでもらうような工夫をしたが、その効果はどうであったかは不確かではあるが、学生が社会に出た際に読書の必要性を感じた際に私の授業の事を思い起こしてくれればそれでよいと思っている。

5. 授業はトキメキ¹⁴⁾

“ここ数年、高校3年生のクラスを担当していますが、...以前扱った教科書の中に複雑な英文がありました。生徒はこんがらがった糸をほぐすようにしてやっと訳せたのですが、訳した後で、「なあにこれ?こんなこと?」と、複雑な英文のわりには余り意味のない内容にきょとんとしている姿が忘れられません。...昨年度は総合コース2年生英語6時間のうち2時間は教科書を指定されていなかったもので、映画をもとにしたThe Sound Of Musicのテキスト(三友社出版)を使うことにしました。...私たちはこのテキストを記号づけのプリントにして行うことにしました。...プリントには辞書を引かなくてもよいくらいの「ヒント」が書いてありますが、それ以外の特にわかりにくい所は黒板に説明を書いております。...ところで提出されたプリントはどうするかということですが、一枚一枚全部目を通して間違いを直し、テスト前に一括して返しました。...さてこうした授業を生徒はどのように受け止め、やりきったでしょうか。生徒には感想文「私と英語」を書いてもらい、授業アンケート(資料)もおこないました。

次に生徒の感想文を幾つか紹介します。...(2)このような小説を読解してゆくのは楽しかったです。自分でも書店で英語の小説という簡単な物語を買って一人で読んでみました。おおまかなストーリーだけどわかった気がしました。こうやって、徐々に英語に親しんでいきたいと思います。(椎名)¹⁵⁾”

高校生の英語の授業の工夫とその効果の一例を紹介したが、教師側に教育に対する熱意・工夫がいかに大切であるかを学ぶことができた。しかし、このような授業アンケート(資料)に見られるような実践的文章を筆者が行った授業評価アンケートで見たことはない、大学生自身はもっと真剣に授業評価アンケートに答え、よりよい授業のための指針となるべきであろう。

6. 科学者という仕事¹⁶⁾

「訓練と自由」の中で、“それでは、高等教育はどうだろうか。特に理工系の分野では、実験や実習を通して技術的な訓練が必要だ。しかし、高等教育のすべてが「訓練」であってはならないと考える。大学で学ぶことが訓練の延長であり義務的なものだと見なされれば、学問の自由が間違いなく損なわれる。それは、教育が受け身的になって、主体的な研究の芽まで摘んでしまうからである。プリンストン大学の新入生に向けて、アインシュタインは次のように述べている(一九三三年)。

大学での勉学を決して義務だと見なさないように、そうではなくて君達自身にとって喜ばしく、そして君達の今後の仕事が奉げられる社会にとって望ましいことには、精神面での解放された美に接するという、うらやむべき機会なのだと思います。

現在の高等教育では、...残念なことに、講義選択の自由を増やすと、楽な(出席があまり必要とされず、試験の採点が甘い、要するに履修科目の「単位」が取りやすい)講義に

学生が集中しています¹⁷⁾。“筆者はアインシュタインの言に教育の重みを感じる。最後に引用した講義選択の弊害はJABEEにより改善の方向に向かっているといたい。ただ、JABEE 遂行に当たっては、学生のレポート、試験問題、出席簿等の厳格な保管が義務付けられ、われわれ教員の負担増となっている。

7. 教育科学 / 国語教育¹⁸⁾

総合題目は「読み書き関連で思考力を鍛える」であり、ここでは青山学院大学文学部の小林茂教授の「重層的な言語能力の育成 総花的な関連指導の脱却」から思考力を重視した国語科授業について考えよう。当然ではあるが、思考力は大学のいかなる授業でも重要視されなければならないと筆者は思っている。小林教授は「一「思考力」重視の国語教育とは...この「思考力」について、」「読解力向上に関する指導資料 PISA 調査（読解力）の結果分析と改善の方向」（文部科学省、平成17年12月）に拠れば、次の3つが指摘されている。ア テキストを理解・評価しながら読む力を高めること イ テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること ウ 様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること（15～18頁）つまり、「思考力」重視の授業とは、言語能力としての「テキストを理解・評価しながら読む力」と「テキストに基づいて自分の考えを書く力」を育成することであり、指導方法として、「様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会」を充実することである。...三 PISA 型読解力と国語科授業の改善 「思考力」重視の国語科授業は、PISA 型読解力を視野に入れながら、上述の「読み書き関連」を学習指導過程や「本時の学習指導案」等として捉え直すことである。その推進は、一つは、従来の言語能力観の見直しである。...話す・聞く能

力、単層的に話すこと・聞くことの学習活動だけでは意図的・計画的に育成できない。話す・聞く能力は、話したい言語情報としての確に読み取る能力や聞きたい内容を言語情報としての確に書き取ったりする能力と密接・不離である。つまり、話す・聞く能力をこの三者の重層的な能力として育成する。次に、書く能力も、単層的に書くことの学習活動だけでは意図的・計画的に育成できない。書く能力は、書きたい内容を言語情報としての確に読み取る能力や、相手や目的に応じて、書きまとめた文章を音声言語で説明したりする能力と密接・不離である。...このように、読む能力も、書く能力も、話す・聞く能力も、これら三者は、それぞれが密接不離な関係であり、重層的な「構造」である¹⁹⁾。”小森教授は文学部に所属されていて、筆者が授業前に15分間学生に新聞を読ませ、感動したこと等をA4用紙に記述させている行為²⁰⁾を的確に表現されていることに感服する。ただ、新聞を読ませるのに終止して、学生間で議論する場が欠落していることを認識し何らかの方法で改善せねばと思う。さらに、多くの本を学生に読ませることの重要性を再確認した。

8. 特集 教育改革の現場²¹⁾

本書において著者森田伸子は題目「学力とリテラシー 教育学的二項図式に決別するために」で「学力」とは何をさしているのか、さらに言えば、これらの議論に共通して欠落している視点は何かを問うている。

学び論の陥穽では、“以上見てきたように、PISA リテラシーをどのように受け止めるか、という点に関して、私は佐藤氏と大きく立場を異にしている。それはリテラシー観の違いであるあると同時に、氏の持論である「学び」論に対して、私を感じずにいられない違和感とも結びついている。この点を少し述べておきたい。氏は現代を、「勉強」の時代から「学

び」の「時代への転換期として位置づけている。

もう二度と「勉強」の世界へと子供たちが立ち戻ることはないでしょう。「勉強」の文化を支えてきた東アジア型の「圧縮された近代化」も、「勉強」の文化と対応してきた効率一辺倒の産業主義の社会も、子供たちの足元から消え去っています(佐藤 2000.12.p.55)。

それでは、かくも決定的に失効を宣言された「勉強」と、氏が推奨する「学び」との間にはどのような違いが考えられているのだろうか。氏は次のように述べている。私自身は「勉強」と「学び」との違いは、〈出会いと対話の有無にあると考えています。「勉強」が何ものとも出会わずに何ものとも対話しないで遂行されるのに対して、「学び」はモノや人や事柄と出会い対話する営みであり、他者の思考や感情と出会い対話する営みであり、自分自身と出会い対話する営みであると思いません(同上書 p.56)²²⁾。

森田伸子は教育思想史が専門であり、筆者の安直な教育に対する意見とは格段の差があり、今後参考としたい。

9. 限界への挑戦²³⁾

エサキダイオードで1973年にノーベル物理学賞を受賞した江崎玲於奈氏の書籍である。氏の家族が渡米した際に子供たちは公立のホーレス・グリーリー高校に通った。本校はニューヨークの北、約六十キロ、人口一万七千人のチャバカという町である。“さまざまな能力の生徒に対し、学校はどのように学力達成目標を立てるか、ということが話題になった。わたしがつかんだ議論の結果を図を使って説明してみよう。まず、簡素化して、学力あるいは能力(縦軸)に差のある生徒が十人いるとしよう。そして、トップ一位からボトム十位まで能力順(横軸)に並べる。さて、これらの生徒に対し、四種類の学力達成目標を考えてみよう。(1)すべてに平等に必要

最低レベルの目標設定 (2)すべてに平等に高度な、例えば日本の学習指導要領レベルの目標設定 (3)各人の能力に比例した目標設定 (4)トップグループに対して比例を越えた英才教育的達成目標の設定

このチャバカの高校では、できるだけ、ボトムグループには(1)、中間グループには(2)、そしてトップグループには(3)の学習目標を設定し、特にトップグループは競争させて学力をつけさせようとしているという。もっとも、このように、個別的な目標設定は多数の教員を抱えているからこそできるのである。

わが国では(2)の目標設定をしているのでボトムグループに大きな努力を求めることになる。しかし、文部省「学校教育に関する意識調査」による高校授業の生徒の理解度は決して高くない。「よくわかる」「だいたいわかる」と答えた生徒の合計は僅か三十七%なのである。また、この日本方式の決定的欠陥は英才の芽を摘みかねないということである²⁴⁾。” 筆者も講義のレベルをどの程度の学力の生徒に合わすべきかで悩んできている。筆者は、現在、上述の(1)の学習達成目標によって講義を行っているが、その弊害として講義の進み方が遅くなり、よくできる(理解力の早い)生徒に対しては不満が残る。今後、これらできる学生に対してレベルの高い講義をしなければならない意識は常に持っているが実現していない。

10. コトの本質²⁵⁾

著者松井孝典は東京大学大学院教授であり、地球物理学が専門で著書に『水惑星はなぜ生まれたのか』、『地球進化論』等がある。本書の帯には「考えると何か」考えてみる、とある。私は毎回の講義のときに学生に読んで欲しい本の一冊として平成19年度後期の“土木振動学”講義のときに紹介した。さらに、一部をコピーして学生に配布した。現在の

学生は、ある事柄についてじっくりと考える習慣が身につけていない、と常々思っている。その意味でも教育の現場でぜひ学生に紹介して欲しい一冊である。

本書は4章から構成され、38の小見出しが付けられている。5解くべき問題の姿をはっきり認識して霧と混沌の中を歩き続けるで、考えを持續する生きかたについてこう述べられている。“考えていなければ、ひらめくことはありません。それも四六時中、考えに考えていなければ、突破できないのです。寝ている時だって、考えているといえば考えています。絶えずそのことを思っているのです。知りたい、なんとかそれを知りたいと。そうして、あっちへ行き、だめ、こっちへ行き、だめ、ということくりかえしているのです。…

考えるというそのことが、私の仕事です。四六時中、考えに考えているその状態。それは、まさに自分の望んでいた人生そのものだという事です。こういう状態を、何十年と続けているわけですが、ある瞬間、そこから逃れてみたら楽になるのと思うときはありません。そのくらい考え続けているのです。私にとって、考えるというのはそういうことなのです²⁶⁾。”

助手ほど素敵な職業はないでは、“竹内研究室の助手になった当時はまだ講座制です。それぞれの研究室には、教授一人いて、助教授が一人いて、助手が二人います。当時の講座制では多くの研究室で、研究費の使い方のあれこれから、学生の指導から、講座の雑用すべてを、助手が仕切っていました。教授、助教授の指導の下に、なんでも助手が仕切るという講座が多かったのですが、竹内研究室は違いました。

竹内さんは、多額の研究費を取ってくるだとか、やれ政府の審議会の委員をやるとかを、一切やらない人です。したがって逆に、助手は雑用がほとんどありませんでした。もちろ

ん学生の指導はありますが、それはある意味自分の研究をするだけのことでですから、むしろ歓迎です。研究三昧の生活でいいので、しょっちゅう海外の学会へ出かけて、その後各地の大学を回りセミナーをしたり、自由気ままな生活をしていました²⁷⁾。”

筆者は竹内先生の研究姿勢に共感するが、現代の大学では通用しないことは自明である。また松井氏の研究活動には刺激を受ける。教育と両輪の関係にある研究も地道に続けてゆかねばならない。

11. 魂を養う教育 私の体験的教育論 215の提言 悪から学ぶ教育²⁸⁾

私の好きな作家の一人である、曾野綾子氏の教育提言集である。彼女は1979年、ローマ法王よりヴァチカン法王庁よりヴァチカン有功十字勲章受賞、1993年、日本芸術院賞・恩賜賞受賞をはじめ多くの権威ある受賞をされている。

教育は強制から始まるでは、“戦後の教育は個性の形成、自由を行使する権利だけを教えた。教育は自発的にしたいことだけしかさせてはならない、と今でも信じて疑わない人がいる。しかし人生は複合的だ。したくないことを強制的にさせられる場面も当然あるが、その間に自然にしたいことが見えてきて、親も教師もそれをいいことにして励ましているのが、普通の光景だと思う。

しなければならぬことは強制的にさせ、したいこともさせる、その両面をカバーするのが、人間を創ることだ、とは思わなかったのである²⁹⁾。”

教育の基本ルールでは、日本の教育は、安全第一、予防優先、被害者心理の保護、自発的意思だけを尊重する。それらはすべて悪いものではない。しかしそれらが、整えられるよくてきた環境というものは世界中で非常に少ないし、整えられなければ不幸に思う

といった感じが一般化することはまた、大きな不幸である。

(1)生きるということは、基本的に安全でないことなのだ。(2)予防ということは、どんなに考えても落とし穴があるということなのだ。(3)被害者をいたわるということとは、改めて言わなくても昔から皆がやって来たことだ。しかし時には「労られることに甘えるな。自分で立ち上がれ」と突き放されることの方が、奮い立って楽な場合がある。(4)自発的意思だけをまっぴらにしては、教育も訓練も決してできない。幼いうちは強制的に、子供が長じるに従って次第に自発性を尊重するというのが、教育の順序である。

しかし日本の大人は、近年、こうした若い世代に対する教育の基本ルールを全く教えなくなった。つまりしつけは強制で悪いものだと考えるようになったのだ。だからよく言われていることだが、小学校や中学の時代をまともに終えて来たとも思われない原始人が、そのまま大学に入ってくるようになったのである。

その理由は、幾つか考えられる。(1)親や教師が、自分がいささかでもものわりの悪い、口煩い大人だと思われたくないため、評判を恐れて相手が苦く思うことを言わない。後で先輩の言葉の厳しさに意味を発見してくれるということを全く信じない、という形で、実は若い世代をバカ扱いするか、徹底してお追従教育をしてきたのである。(2)いささか辛い思いをすることの意味や楽しさを、ほとんど認めさせられない。自分自身が既にエアコン、マイカー、テレビなどを当然とする生活の中で育ったからだ。だからスポーツ選手は金メダルを取るとすぐ「自分を褒めて上げたい」などと薄気味悪いことを言う。まずこれは日本語の間違ひを含む。敢えて自分を褒めたいなら、「自分をほめてやりたいです」と言うべきなのだ³⁰⁾。”曾野氏の、この教育基本ルールには首肯する。大学生と接していて、

まず挨拶さえできない学生の多く、われわれ教員の方から声をかける状況だ。講義中に筆者は先人のすぐれた研究業績や人生論を話すと、かならず“授業評価”で曾野氏の言うように、口煩いと苦言がはね返ってくる。これも教育の基本ルールを学ぶ機会のなかった大学生の無知と思うしかあるまい。

本を読まないのは人間じゃないはわれわれにはとても言えないが、曾野氏はここで、“私たちは本を読まなければならない。テレビだけではダメなのだぞ、テレビとコンピュータだけで生きていたら、その人は決して指導者にも専門家にもなれないのだぞ、と親も教師も言わなかった責任は大きい。言わなくてもいいのだ。規範を示す、というやり方がある。しかし今の教師は教師自身が本を読んでいない。忙し過ぎるからだろうと同情はしているが、教師が毎日一言でも、自分が読んだおもしろい本の話をしてやれば、生徒たちは読書の魅力を察するだろう³²⁾。”筆者は自分の読んだ本の一部をコピーして授業中に学生に渡しているが、多くの学生が読書の魅力や必要性を感じているとはとても思えないのが現状だ。今後も、学生には読書の必要性を教え込む心づもりである。

最後の教育の基本 日本人へでは、“近年、日本の教育の荒廃は、見過ごせないものがある。子どもはひ弱で欲望を抑えきれず、子どもを育てるべき大人自身が、しっかりと地に足を着けて人生を見ることなく、功利的な価値観や単純な正義感、時には虚構(バーチャル・リアリティ)で人生を知っていると、勘違いするようになった。その背景には、物質的豊かさと、半世紀以上も続いた平和があった。…戦後教育は、人間が希求するものと、現実の姿とを混同した。私たちは自由を求めるが、しかし人間が完全な自由を得るということは至難な技である。私たちは平等を願うが、人間は生まれた瞬間から、平等でない。運命においても才能においても生まれた土地

においても、私たちは決して平等たり得ない。

…

教育という川の流れの、最初の水源は清冽せいれつな一滴となり得るのは、家庭教育である。…また子どもは、父と母を尊敬したいものである。

個性は、学校で受け入れられる場合と拒否され理解されない場合とがあるが、それは人生の如何なる時点にもあり得る矛盾である。それゆえ理解されない苦難にいかにか耐えるか、ということも、一つの学習である。もちろんそれには、別の角度から、家庭や友人などの支持が大きな助けになるのは言うまでもない。

人格のできていない人間は、本来高等教育を受ける資格がない。善悪をわきまえる感覚が、学問に優先して存在すべきものであろう。そのために、私たちの先人は実に豊かな財産を残している。日本語を駆使して、複雑な心情の表現を可能にする、読み、書き、話す技術はもっと大切にしたい。

教師は、改めて徳と知識の双方を保有して欲しい。そのため、教師自身が絶えず勉強を続けることが望まれる。生徒と保護者は、その結果として、教師に人格的権威を自然に感じるようになるのが理想である。

今までの教育は、要求することに主力をおいたものであった。しかしこれからは、与えられ、与えることの双方が個人と社会の中で暖かい潮流を作ることを望みたい。個人の発見と自立は、自然に自分の周囲にいる他者への献身や奉仕を可能にし、さらにはまだ会ったことのないもっと大勢の人々の幸福を願う公的な視野にまで広がる方向性持つ³³⁾。” 筆者は改めて大学生に講義をするのだけでなく、道徳心に問題のないような学生を育て上げることの大切さを学んだ。さらに、当然のことではあるが、われわれ自身が絶えず研究・教育活動に邁進せねばならない。

12. 新・学問のすすめ³⁴⁾

著者の和田秀樹氏は1960年生まれ、精神科医である。著書には、『学力崩壊』、『大人のための勉強法』、『頭のいい大学4年間の生き方』、『勉強のできる人、できない人』、など勉強に関するものが多い。

本書では著者からのメッセージとして“勉強は、自分を信じる者を救う。人の平等が保障されない世の中になった以上、自分を信じて、よりよいやり方で勉強、学ぶしか、人生を切り開く方法はない³⁵⁾。”と断言している。本書の構成は次のとおりである、【第1章】なぜ学ぶのか、その根拠をつかむ、【第2章】日本に「頭脳敗戦」が迫っている、【第3章】国のために学問する意味を説く、【第4章】学問するには方法がある。

第1章において、『学ぶ意欲がなぜ衰えたのか』で“「勉強をやらないこと」への主な理由は三つあると思う。一つ目の理由「勉強して何の役に立つのか」という理屈。たとえば、世界史の年号を覚えて何の役に立つんだと考える人が多い。数学の問題が解けるようになって社会生活に何の役に立つのか。こうした疑問が頭をよぎる人は少なくないと思う。

もちろん、教養として習っておいてもいいという考えもあるが……。仮に、この両者を比べた場合、役に立たないから習わなくてもいいと考える人のほうが多いのではないだろうか。社会に出て世界史の知識を試される機会はほとんどないと思うかもしれない。しかし、私は、その知識以上に世界史の年号を覚えることによって、記憶力が高まるということに価値があると考えている。…このように習った内容は役に立たなくても、勉強することで身につく能力は一生役立つものだし、これからさらにその傾向が強まるであろう。

二つ目の理由「つらいからやらない」。

これは、先に述べたように勉強は「苦しい

からやらない」ことだ。これについては妙な理屈がまかり通っている。いま、ありとあらゆるつらいことがストレスと呼ばれている。例えば、子どもにストレスやプレッシャーをかけてはいけない、子どもはつらいことをやらなくてもいいという変な価値観が蔓延しているようだ。実際は、ある程度までのつらさは人間の能力を高め(これを善玉ストレスと呼ぶ)、それが一定よりつらさがひどいときに、人間の能力を落としていく(これが悪玉ストレスと呼ばれるものだ)。だから、つらさというのは程度の問題ということになる。

しかし、私は、あえて「勉強はつらいぐらいでちょうどいい」と考えている。つらくてもやるという経験は大事な経験だと思う。これは勉強にかぎらず、スポーツをやる場合も同様だ。「つらいことが何で悪いのだ。つらいことこそ意味があるのではないか」といいたい。...

三つ目の理由 希望にも格差が生まれた。
 繰返しになるが、要するに、戦後は、家柄や世襲もない状態が生じた。たとえば財閥は、世襲のトップクラスから番頭クラスの高学歴の人間が後を継いだ。官僚も家柄より学歴が重視された。すなわち、これからの時代は学問をつけていけば、チャンスが手に入る平等な社会になった。いわばだれにでも希望が生まれた。そういう時代に格差はなかった。しかし、ここにきて戦後 培われた希望にかけりが生まれた。

一つには、団塊の世代の厳しい受験競争で、勝てなかった人が大量に生まれたという背景がある。あんなに勉強したのに、希望の学校に行けなかったという人は、頭のよさは親譲りだ、要するに才能の問題だと考えるようになった。そういった後ろ向きな諦めの感覚が蔓延し、その人達が親になることで、多くの若者の希望や意欲を殺している。

あるいは、そういう親たちは、自分がしたような苦勞を子どもにさせたくないという考

えも強い。結果的に、子どもたちに「無理はしなくていい」と伝え、「勉強はつらいからいやだ」というムードを容認していく。そのうえ、バブル期や、その後の不景気で多少の努力で這い上がれないことが現実化し、また就職も難しくなると、さらに諦めが蔓延する。これが現代の「希望の格差」のもとになっているのではないだろうか³⁶⁾。

以上、著者の『学ぶ意欲がなぜ衰えたのか』の考え方を少し長く引用したが、これに対する筆者の意見を述べる。一つ目の理由は初等・高等教育の生徒たちが考えることであり、種々の学問分野での知識が相乗作用により、自分自身の教養や教育に対する意欲につながることは社会に出ないと分からないことだと考える。二つ目の理由については精神科医の著者であるから「勉強はつらいぐらいでちょうどいい」という厳しい指摘をされるが、今の時代ストレスで学校に行けなく辛い思いをしている生徒たちにとっては、この指摘は厳しすぎよう。三つ目の理由は必ずしも的を射ているとは思わない。私も団塊の世代であるが、自分たちが勉強で苦勞したから、子どもたちに「無理はしなくていい」とは言わない。世の中にソフトゲーム、パソコンや携帯電話の普及により勉強に打ち込む時間が大幅に減少していることが根幹にあると反駁したい。

13. 最高学府はバカだらけ 全入時代の大学「崖っぷち」事情³⁷⁾

著者の石渡嶺司氏はあとがきで、部分によっては乱暴な書き方になっているが、どうかお許しいただきたい、と書いている位、本書は荒っぽい言語が目立つ。

第二章は、バカ学生を生む犯人は誰か? についてであるが、自省せねばならない点もあり興味深い。“「ウチはまったく悪くない」について、バカ学生が生まれる原因を探すと、大学教職員は大学外に犯人を探そうとする。

実のところ、バカ学生の発生は歴史的なものもあるし、ガンと同じで一つの原因をもってすべて解決する、という問題ではない。そして、舞台が大学である以上は大学にも原因があるに決まっている。ならば、それを認めたくて大学にできることは何かを考えればいい。この簡単な道理を認めない大学教職員のなんと多いことか！私の知る少数の良心的な教職員を除けば、ほぼ例外なく校門の外にいる他者を原因だと決めつける。…大学教職員の多くが真っ先にあげるのが、この「**高校教育劣化**」説である。たしかに、大学教職員はバカ学生を見るたびに「こいつら高校でどんな教育を受けたんだ？」とイライラするに違いない。高校教職員にとっては不快だろうが、槍玉に挙がるのも当然だ。大学にとって高校は「お客様」という部分もある。生徒を大学に送り込んでくれるかくれないかで営業成績が大きく変わるからだ。そんな「お客様」のことを悪く言うのは他でもない、高校教職員の態度があまりに悪いからだ³⁸⁾。”

「**文科省理念先行**」説では、“ 文部科学省のどこがまずいかというと、「理念が正しく」「それでいて現実に即していない」という二点に集約される。…「**両親ヘリコプター化**」説は…親が過保護なのか、しつけが不十分なのか、あるいは両方なのか。はっきりしているのは、これまで考えられなかったような「**変な親**」による問題が教育現場で噴出していることだ。これは大学も例外でない³⁹⁾。”

第三章では、大学そのものに問題はないかが検証されている。「入試激化」、「推薦・AO入試激増」、「大学乱立」説の他に、“**「大学教職員不能**」説では、個人個人の事務能力を大幅に超えた仕事量を大学の教職員が抱えていることも身逃せない。そこで「**機能不全**」の意味も込めて「**不能説**」とした。…大学教職員が機能不全に陥っていると、そのしわ寄せは学生に来る。本来は受けられるはずだった学生への支援やサービスも不十分なものと

なる。結果論としてバカ学生増加に寄与してしまう。この「**大学教職員不能**」説は大学教職員が原因でない。原因は、人員を十分に確保しないまま大学を運営しようとした大学幹部にある。大阪府立大の事件は氷山の一角であり、どの大学でも起こり得ることであることを指摘したい⁴⁰⁾。” 現在、山口大学でも教職員数が削減されているが、学生に十分な教育を提供することができる大学運営体制を維持せねばならないと強く感じた。さらに、入学者数の確保にも力を注がねばならない。

14. いま日本の教育を考える⁴¹⁾

本書で議論される教育は初等教育であるものの、高等教育にも相通じるものがあり、ここで取り上げた。本書の構成は**第一章いま子どもは？親は？学校は？**、**第二章ではどうすればいいのか**、**第三章戦後教育のもたらしたものと**なっている。第二章の**2 教える**てるといふことに筆者は心を打たれた。それを若干長くなるが、引用しよう。“わたしたちおとな(教師)は、子ども(学生)は、当然こんなことは、(こんなことぐらいは)知っていると、と思って(決めこんで教えることをしていない。そして相手にそのことができないとなると、それを自分の指導力は棚にあげ、非は全て子ども(学生)にあり、としてなすくりつける。「**いまどきの子ども(学生)はこんなこともできない 教わってきていない**」と。あげく、家庭教育がなっていない、とまで…。ができれば教える、それが教育でしょう。教わってきていんじゃないければ、改めて教え直す、これが教育する、ということでしょう。それを殆どといっていいほどの教師が怠っている。無自覚、不見識に。このことに気づいただけでも、教育は格段の進歩をすることになります。…「**教育**」とは、読んで字の如く、**教える**てること。教えないところからは何も始まっていけないのです⁴²⁾。” 著

者の言っていることは当たり前だといえば、それまでだが、筆者は教育について改めて教えられた気がする。すなわち、大学の授業で学生が理解できないと、「これ位のことは高校で習っているはずだ。」という気持ちが頭をもたげ、腹立たしく思うことが多い。このような考えに立脚すると、授業のレベルを下げねばならないと思うが、逆に彼らが社会に出たときに、「大学でこれくらいのことは教わっていないのか。」と言われかねない。この著者からは、理解のできない学生に対して見下げる発言や態度は良くないことを教えられた。

15. 30年後を展望する中規模大学 マネジメント | が学習支援 | 連携⁴³⁾

著者市川太一は現在、広島修道大学法学部教授であり、1996年4月～2002年3月まで学長にあった。現在、教育ネットワーク中国代表幹事、全国大学コンソーシアム協議会幹事などをつとめている。

“日本私立大学振興・共済事業団は、二〇〇六年度の大学の入学志願動向を分析したデータを基にして、上表(割愛)のように、入学定員五〇〇人未満の私立大学を小規模、五〇〇人以上三〇〇〇人未満の大学を中規模、三〇〇〇人以上を大規模大学と区分している(『月報私学』二〇〇〇年十一月号)。…大規模大学、そして東京と近畿圏へ志願者は集中しつつある。大学の規模と地域について、大学を取り巻く環境が違うことが理解していただけだと思う⁴⁴⁾。”私大と国立大学法人の差異に囚われないのであれば、平成19年度の山口大学の入学定員は一八九五人で、中規模大学の範疇に分類される。なお、日本の大学の90%以上が中規模大学である。

市川太一は本書で「Ⅰ 学習支援」、「Ⅱ 大学マネジメント」、「Ⅲ 教育機構連携」から構成される。「学習支援」では参加型授業

を通じて基本的なスキルを養う中で次の5つの教育の柱を要求している。“1本を読み、考え、意見を発表し、まとめる力を養う。…文章を書くだけでなく、本を読む、考える、意見を発表する、まとめる力を養う授業。人数が多い講義でも少人数教育でも、教員が一方的に話すのではなく、学生同士が意見を交換する授業…2 思考のプロセスを段階的に教えていく、…3 中規模、大規模の授業で新書を読む、…4 小規模、中規模の授業でテーマをめぐるグループ討議、…5 教育改革を支援する大学マネジメントを…教育改革は授業方法の改革にとどまらない。施設や設備も改善されなければならない。固定式の机は、教員は話す人、学生は聞く人という一方向的な関係を前提にしている。…グループワークができる教室環境の整備をはじめ、現在の学生の状況にあった教育空間をどう創っていくのかも課題である⁴⁵⁾。”著者の言うように本を読み、考え、意見を発表し、まとめる力は教育の根幹に関わることであり、と筆者も同感である。しかし、現状の教育システムでは、授業時間等が障害となり、これらを実行することは難しい。

“Ⅲ 2 大学連携から小中高大連携へでは、二〇〇五年十一月、広島県の矢野西小学校において小学校一年生の女児殺害事件が起きた。…こういった事件の起きる原因はいくつかあるだろうが、根底には地域社会が変質し、地域社会において人間同士のつながりが少なくなり、子どもたちの目が行き届かなくなっていることに起因している。…大学は地域社会そのものとして、この社会との関係を考えていたけれども現在では地域社会は自然にあるものではない。大学は小中高校や教育委員会などと連携して、地域社会を創っていくという視点と行動が求められている⁴⁶⁾。”先の書籍の引用^{39), 42)}では、大学教員が高校教育のあり方に批判的に言及していたが、本書の小中高大連携構想は大学教育の質の向上に期待

できるものと筆者は考える。

16. 大学のエスノグラフィティ⁴⁷⁾

東京大学大学院総合文化研究科教授で文化人類学者の船曳建夫の著書である。エスノグラフィティとはある集団や社会の全体を記述したものをいう。第1章「ゼミの風景から」の第1節「先生」—よい先生とは、先生という方法の中で「全人教育」が目にとまった。少々長くなるが、引用しよう。“...そうした、先生が学生に正面から向き合う、やや気恥ずかしい言葉ですが、全人教育というものがあります。しかし、それはもうすでに無理になってきている、という人がいます。先生の持っている知識は、大学に行かなくても本になって出ている。それも難易度を変えて様々なかたちで。だから(大)昔なら学生が全人的な存在を期待するような、「大学教授」としてのオーラはすでにない。要するに大学の先生とは、ある専門家であって、「師」ではなく、また「知識人」ですらない、と。また、複雑な社会では、先生が先生らしく振舞い続け、学生の期待に応えるというのが難しくなっている。何よりも、先生の持っている知識はしばしば時代遅れになり、先生が先生らしくなればなるほど、時代錯誤の戯画化されやすい存在となる。しかし大学院の専門教育とはべつに、大学の二歳前後の若者たちにとっては、その大学の先生がどんなに単なる「専門バカ」であっても、ある種の信念を持った人間に出会うことは、それがすぐ捨ててしまうモデルであったとしても、重要であると思えます。...ですから、通り過ぎる過程として、大学の先生がどこかで学生に全面的に向かい合う、その知識が単に抽象的な中立な知識としてではなく、その先生の人格と生活の中でどんな意味を持っているかまでを伝えることは必要である、と考えます。それが私が考える全人教育であり、...”⁴⁸⁾

筆者は授業で個々の学生とできるだけ対話できるようにつとめており、そのため授業の進捗状況が芳しくないが、それはそれとして割り切っている。著者の言われる「全人教育」に近いものであると確信する。

第4章「大学人の二足のわらじ」の第1節『研究と教育』で教育はむなしいか、について以下のように述べている。“研究は「内」のことがらです。教育も活動としては「内」なのです。しかし、それが外部から入ってくる「学生」に対して行うこと、その成果が学生が卒業し外に出て行って見せる活動で評価されることの二点から、「外」の仕事なのです。その意味で、大学の側(大学の当局者と大学を指導する役所)が教育に、研究と同等の、ときには研究以上の努力をせよとうながすのは当然です。それが外部の一般社会に大学の存在理由を示すことになるからです。では、なぜ、大学教師が「研究と教育」を二足のわらじと感じ、教育を嫌って研究を重視する傾向があるのかと言えば、こういうことです。教育は学生の内側に残るだけで、その成果が学生の業績や人格として現れるのは、彼らが卒業して数十年経ってからです。...一方、研究の成果は論文、書物という具体的なかたちを取り、教育よりも比較的早く出来上がり、そこには研究者の名前が刻印され、その努力は個人的に評価されます。となれば、教育はむなく苦痛だ、「自分の」仕事は研究だ、というのはむべなるかなです。この二足のわらじはどのように「解決」可能でしょうか。まず第一に、いやなことはしない。教育の放棄というみちがあります。これは話にならない、と見えますが、そうでもない。これを考えるには、大学の「教育」には二種あることに気付かなければなりません。一つは私の場合でしたら、文化人類学者になる学生への文化人類学の教育です。二つ目は、物理学者になるとか金融の世界で仕事をする学生への文化人類学の教育です。前者の教育は放棄する

ことが出来ない。こっそり自分だけさぼることは出来ますが、全ての文化人類学者がそれをしたら自分の仕事を評価してくれる文化人類学の後進がいなくなり、自分の仕事の意味の消滅となる。また、この専門家の卵への教育も、学生が孵化し、その学問レベルが上がるにつれ、次第に「研究」に近づきます。大学院生への教育は教えつつ教えられるものです。理系の学問であれば、大学院生は教育の対象であるだけでなく、自分の研究の協力者、または下働きでもあることがある。ですから、この後進への教育は研究としての意味はあり、またその必要性から放棄できません⁴⁹⁾。”著者の、この考えを筆者に当てはめるならば、一つは放棄することが出来ないのが土木全般に関する教育であり、二つ目は筆者がよく引用する「物理学者・随筆家の寺田寅彦の研究心」である⁵⁰⁾。山口大学工学部も大学院理工学研究科となり、大学院教育に一層のエネルギーを注がねばならないが、その教育には学部と違って研究面に軸足を置かねばならないと筆者は考えている。

17. 教育をどう変えるのか⁵¹⁾

著者は元公立学校教員である。本書の帯にはわが国の戦前・戦後教育を問い直し教育の本来の役割とあるべき姿を探ると書かれている。四章2(1)あるべき教育理念づくりに著者独自の教育論が読み取れるので、引用しておこう。“さてあるべき教育理念とはどのようなものであればいいのかということになるが、わたしはそれは個人のための教育をどんどん進めていけば全体のためになり、全体のための教育は必ず個人のためになるそのようなものでなければならないと考える。つまり、個人の教育の目的すなわち利益が、全体、国家や社会のそれと矛盾なく合致するものということになる。この矛盾なくということがすこぶる大切なところである。このことは、国

家主義教育も、個人主義教育もともに虚像教育にならざるを得ず、結局どちらもわれわれの生存と共存を脅かすものとなること、すなわち、戦前のお国のため、天皇のためという忠君愛国の教育が個人をつぶし、国を滅ぼしたこと、また、戦後の個人の自由、平等優先の教育が人間をだめにし社会を混迷に陥れ、国を滅ぼしかねない状況に立ち至らせている状況から学んだものである。したがって、現行の二次元教育、すなわち、主に全体のためをめざす戦前を受け継ぐ垂直教育と戦後を代表するひとりひとりのどこまでも自由、平等の実現をめざす水平化教育のどちらもまたそれらをたして2で割ったときなども、その理念となることは決して許されないのである。このような理由からわれわれはこれらとは一線を画した、個人のための教育を進めていくと自然に社会全体のためにもなるという個と全体の利害が調和する教育の理念を創造しなければならないということになる。…わが国の戦後教育、すなわち、ひとに勝つこと、他校に勝つこと、他国に勝つことに血眼となる教育は特異な光を放った。…そしてわが国は世界で一、二という大金持ち国家となり、かつてのような神国意識を蘇らせた。…しかし、これらのことよりもっと恐ろしい陰がある。それは教育の混迷による教育の荒廃、すなわち、若者の不健全化と人格を崩壊に導くすでに述べた教育病理現象である。”亢竜悔いあり“とはまさにわが戦後を的確に表現する言葉ではなからうか。…正しい競争のあり方、それは節度を守ること優勝や一番をめざさないこと、歌の文句ではないがおのれに克つことすなわち真面目に一生懸命にはたらくことの外はない。これが、今、教育が一番耳を傾けなければならない生みの親、経済の声である⁵²⁾。”著者の言うように、個人の教育が全体の教育に還元されることは、各教員が切磋琢磨して学生の教育に当たれば、社会が評価してくれるというようになるものと理解

したい。さらに、筆者も学生も一生懸命に教え、学ぶことの大切さを教えられた。

18. 教育を支えるもの⁵³⁾

第二部第三章「円熟した教育者の基本的態度」において、日頃われわれが教鞭をとっている中で忘れがちな精神面について記述しており、ぜひとも参考にしたい、と思う。少し長くなるが、本質的な箇所を引用しておく。

“円熟した教育者の人間的な基本態度は、清明と善意とユーモア、これら三つの相互に分かちがたく緊密に結び合っている顕著な特性によって、もっともよく特徴づけられる。…清明は、おそらく、至福にもっとも近いものである。少なくとも、カルスがかつてこの概念を、魂の「かの最高の安らぎと真実と澄明、存在のかの最高を、宿す」ものとして捉えた例に、それがみられる。…それゆえに、このような静かな清明が、家庭や教育や、他のあらゆる教育的状況における、教育的雰囲気全体に、隈なく漲ることが、限りなく重要なのである。したがって教育者は、子どもの学校生活を重苦しくするようなさまざまの傾向、例えば、責任感のあまりこれを義務とさえ思いこみがちなくそ真面目さや、あるいは不機嫌、さらにはともすれば教室全体に伝播して子どもたちの喜ばしい構えを窒息させてしまう無愛想な態度などを退けて、たえず、新たに清明さをつらぬいてゆかなければいけない。…教育的見地からすれば、ユーモアとは、子どもの小さな悩みごとを、ある一定の高みから余裕をもって眺め、軽ろやかに受けながす能力である。…あらゆる教育的ユーモアは、子どもがかなり成長しているか、すっかり成長しているかのいずれにせよ、子どもを少しばかり子ども扱いにするものであり、そして子ども自身が、このような彼の役割に、(少なくとも一時的に)みずからすすんで同和してくるばあいにかぎり、教育的ユーモアはその

の目的を達するのである。

…善意は、人生のあらゆる避けがたい苦悩と混迷についての深い了知である。ゲーテの言葉をかりていえば、「すでに人生の迷宮に深く通じた人」の態度である。…しかし善意は、それにとどまらず、特に、教育者をして教育者たらしめる基本的特徴である善意は、主として円熟した人間の態度である。…苦しみの中から生まれた、このような年若い人間の善意を、(ゲーテは)『親和力』の中で、苦しみと負い目を潜りぬけ、すでにほとんど聖者の境地に達し、新たな教育的課題へ向かっていったオティリーエについて述べた個所で、美しく描いている。ここで彼女は、「年齒もゆかぬわが若者たちの困惑に目を向け、彼らの子どもらしい苦しみに微笑みかけ、そしてやさしい手をさしのべて、若者たちをあらゆる混迷の中から救い出させるならば、私は、どんなに晴れやかになることであろう」と語っている。この言葉は、これまで取り上げてきた清明とユーモアと善意という三つの本質の特徴が合一した姿を、このうえなく適確な表現によって、はっきりと示している。このような教育者のもとでは、すべてが、あたかもおのずからそうなるかのように、正しく整えられるのである。教育者のすぐれた徳が、他の人間に対しても徳を容易ならしめるのだといえよう⁵⁴⁾。“上述したように、円熟した教育者の人間としての態度には清明、ユーモアおよび善意が不可欠であることを筆者は教えられた。

19. 教育の名言 すばらしい子どもたち⁵⁵⁾

本書の「あとがき」に次のように述べてある。“…古今東西の知恵を持ち寄って、子どもたちのゆたかな明日のために、息苦しい教育現場に風穴をあけよう。そのためには日々努力している人たちを励ますことばを拾い集めてみよう。また、これから家庭で、さらに

は社会全体のなかで子どもたちを育てていこうと思っている若い人々のために、すぐれた先人たちのことばを味わってもらおう。そう思って、本書は企画された⁵⁶⁾。” 前述した市川太一の小中高大連携教育論⁴⁶⁾を首肯する筆者にとっては、本書の子どもたちは児童から大学生までの広範囲な生徒として考えたい。

本書には過去の大思想家や有名人のことばだけでなく、地道に実践的成果を挙げられた人のことばやまったく無名の子どもをつぶやき、都合168人のことばが収められている。そのうちのいくつかを簡単に紹介しておく。“われわれは、学校のためにではなくて、人生のために学ばねばならぬ。(セネカ)このことばを読んだジョン・ロックは、そのことに共感しつつ、「われわれの現在の教育は、われわれが世間へ出るための準備というよりはむしろ、大学へ入る準備をしているのです」(『教育に関する考察』)となげいた。そして、三百年を経た東洋の島国においても、やはり同じなげきが繰り返されている。…命令されたことを忠実に実行する人間をつくる目的があるなら、日本ほど学校教育によって、見事にその目的が達成されている国は少ないのではなからうか。受験体制の悪を人ごとのように批判するのは簡単だ。しかし、大学も学校も社会も、この体制に寄与している面がありはしないか。これに寄与していないと断言できるのはただ一人、学習の主体であるべき子どもだけだ。子どもに自由を与えよ。そうすれば、受験体制はつぶれるであろう。 滝内大三⁵⁷⁾”。 前述した和田秀樹は“**あえていう、エリート教育の有効性を考える**において、いま、地球上に日本と同じように勉学問題で病み始めている国がかなりあるだろう。日本では、一九七〇年代後半から、「子どもをもっと自由にしなければいけない」「子どもの創造力を伸ばしたほうがよい」という考えが強まった。たしかにアメリカやヨーロッパ諸国で自由教育を実施した時期があった。

…自由にさせたほうが子どもの学力が上がる信じられていただけだ。…すなわち、勉強ができる人間が嫌われ、疎かにされる国は、世界中でおそらく日本以外ないであろう⁵⁸⁾。” 大学で講義をしていて自由と拘束のかねあいというか、バランスが必要であると筆者は思う。拘束の一つは当たり前であろうが、宿題を必ず課すことだ。

“管理は教育の自殺行為である。(石井和彦)

石井和彦は私立高校の社会科教師である。…石井は、こういう管理教育は、実は生徒にとっても教師にとっても「もっとも甘い教育」なのだと断言する。上から与えられた枠組みに無批判にしたがう主体性のない人間をつくるにすぎないからだ。主体的に、そして深く考える態度と能力の育成こそが、生活指導の根本でなければならない。管理主義教育は、教師の意志や善意がどうであれ、ものいわぬおとなしいヒツジの群れを育てる。それは、とうてい教育の名に値しない。…「管理によって、若者はまず何よりも、創造と活力を奪われる。若者の特権は、自分のやってみようことを思う存分、自由にやってみるところにある。…」さらに、管理は、若者から主体性を奪う。自分で考え、自分で判断する力と自信とを根こそぎにするのである。…」 堀真一郎⁵⁹⁾” 筆者は石井氏のこの考え方を大学生に当てはめてみたが、教育目標を設定することが広義の管理主義教育の一環であると考えるのであれば、石井氏の主張はあまりにも偏見であるといわざるを得ない。現在の大学教育でも十分に学生の自主性を重んじている。しかし、残念ながら多くの学生がそのことに呼応してくれていないのが現状である。

20. 教師は夢を語れなきゃ!!⁶⁰⁾

著者の山本満敏はかつて日本の公立中学校で正式採用の英語教諭であったが、一九九四年に辞職。帰国後再び日本で教えることを胸

に誓って渡米し、現地の学校で教える。安定した職に就いたのに勿体ないという周囲の反対を押し切って。本書の帯には、こう記されている。『流浪のサムライ教師』フィジー、インド、タイ、エチオピア、日本…。世界の学校を渡り、生きる意味と命に向き合う。その裏には、譲れない捨て身の信念があった。大学での教育では考えられない彼の経歴や帯の言葉に感動し、本書を購入した。

本書では外国での生活や授業について詳述されているが、第4章の**教師の仕事って何なのだろう...**から引用しよう。“...教える・学ぶというのはテストの点を競うだけのちっぽけなものであるはずがない。「生きる」ということ。しかし、それには人生や生き方が関わってくるはずであるのに、実際はそんなことが後回しにされ、教育というのが数字の評価に振り回されてしまっている。教師が夢というものを口にするとしたら、多くの生徒は机に向かわせるための餌として利用されているだけのような気がします。「夢を叶えるために勉強しなさい」。それは正しいようでもありますが、どこからか方法と目的がすり替えられ、夢さえも金や地位といった打算的なものに置き換えられてしまう。人としての夢、人が輝くこと……。そんなことが目指すべき幸せであるのは自明であるのに、何かが歪んでしまっている。憲法や法律に定められているからではなくて、大人や教師は人として内なる魂に従って次世代を教え、そのためには自らがそれに相応しい生き方をすべきではないでしょうか。...よく「頑張り」という言葉の是非が問われます（この言葉は人を追い込むだけという）。しかし、励ますことはもちろん、頑張ること自体すばらしいことであって、それが否定される道理はありません。頑張らない人間なんて怠け者。頑張っている人こそ輝いている。でもそれなら、どうやったら人を励まし、頑張らせることが出来るか?.....それはきっと、教える者が黙ってそういう生き

方をするのでしょ。その姿を見た者が「よし、自分も頑張ろう！」って思うように。言葉というのは大切だけれど、どんな雄弁よりも無言のメッセージが本物であるし、そう出来る人の放つ言葉こそ人を動かせるのでしょ。私の職業は冒険家でも旅行家でもありません。あくまでも教師。スポーツ選手はスタジアムで、ミュージシャンはコンサートホールで自らが輝き、人々に勇気を与えます。同じように、生徒に夢を与えられる教師。それが私の目指す姿。まず、教師（大人）がやらなくちゃ！私は信じた通りに生きるだけです⁶¹⁾。”大学の使命はいうまでもなく、教育・研究・地域貢献が3本柱であるが、新入生に対して、教員の取り組んでいる研究・地域貢献について講義する機会があれば、本著者の求めている人生や生き方が学生諸君に伝わるのでないかと考える。

むすび

主に著書を中心に総数20冊の教育に関する文献から次のことが浮き彫りとなった。著者には初等・中等・高等教育機関の先生をはじめ、作家もいる。したがって、大学教育そのものに関する著書を選択した形にはなっていないが、教育を考える際には当然、小・中・高校の教育の実態も知っておくことが理想だと考えてその類の著書も参考にした。

授業の根幹になるのは読書あるいは国語力であることが理解できた。換言すれば、授業に出席しても書物を読んでも理解力が不足であれば勉強していることができないのは自然な発想である。また教師は生徒たちに夢を語ることができ、さらに熱意が必要であるとともに自分自身を教育することが良い授業につながる。すなわち、切磋琢磨して授業に当たることが肝要であり、教師は授業の専門家にならねばならない。

生徒の学力低下の問題は深刻であるが、授

業の達成目標等を設定し、さらに生徒が積極的に学ぶという意識改革が求められる。そのためには、学生を下げすぎむことをやめ、高校で習っていないことも大学の授業で学生に理解させねばなるまい。教員と学生が同じように学ぶ意識を共有したい。

大学の使命は教育・研究・地域貢献であることは言うまでもないが、教育を社会に公開することで教師の教育力の評価が可能になるので、学内者の授業参観だけではなく、学外者の同様な参加が必要ではあるまいか。教師と学生が同じように学ぶ意識を共有することにより、共同体が形成できる。すなわち、大学は社会に開かれた大学に変革すべきである。

卒業を見据えた教育も必要であり、専門教育だけでなく、いろいろなことを勉強することの大切さを生徒に知らしめることが必要である。実際、企業人による高校・大学での授業で実施されており、生徒の視野を広げるとともに新しい知識の習得に大きく寄与している。

学問の多様化にともない学習すべき事柄が増えてきている中、従前の教養教育は必要であり、四年間の大学授業では学生は学習時間が不足する。そのため、今後、修士課程への進学により教育はもちろん、研究能力を養うことが社会的要請であると考えられる。

少子化による大学全入時代に入っても、大学教育レベルを下げないという意識を大学当局はもちろん教職員は持ち続けなければならない。これに関連して、高大連携に留まらず、小中高大連携教育の実現により、教育を含めた学校での諸問題に知恵を出し合い解決し、地域に密着した教育が進展することを期待して止まない。

(理工学研究科 教授)

【参考文献】

1) 山本哲朗：教育について学ぶ，山口大学教育

機構，No.4, pp.23～35, 2007.

- 2) 工藤順一：国語のできる子どもを育てる，講談社現代新書，2004.
- 3) 同上，pp.62～63.
- 4) 同上，p.77.
- 5) 同上，pp.156～157.
- 6) 広田照幸：教育不信と教育依存の時代，紀伊国屋書店，2006.
- 7) 同上，pp.43～46.
- 8) 同上，p.248.
- 9) 齊藤 孝：教育力，岩波新書，2007.
- 10) 同上：pp.5～6.
- 11) 同上：pp.18～19.
- 12) 同上：pp.28～29.
- 13) 同上：p.199.
- 14) 岩井志ず子：記号研「英語の授業」実践シリーズ2 実践記録「授業はトキメキ」あすなろ社，2006，
- 15) 同上：pp.37～41.
- 16) 酒井邦嘉：科学者という仕事 独創性はどのように生まれるか，中公新書，2006.
- 17) 同上：pp.220～221.
- 18) 教育科学/国語教育 No.684，明治図書，2007.
- 19) 同上：pp.8～10.
- 20) 山本哲朗：講義前10分間，科学についての新聞記事を読ませる，山口大学工学教育，Vol.2, pp.12～15, 2003.
- 21) 池上善彦編集：現代思想，4 vol.34-5，2006
- 22) 同上：森田伸子 学力論争とリテラシー 教育学的二項図式に訣別するために，p.143.
- 23) 江崎玲於奈：限界への挑戦 私の履歴書，日本経済新聞出版社，2007.
- 24) 同上：pp.157～159.
- 25) 松井孝典：コトの本質，講談社，2006.
- 26) 同上：pp.30～32.
- 27) 同上：pp.169～170.
- 28) 曾野綾子：魂を養う教育 私の体験的教育論 215の提言 悪から学ぶ教育，海竜社，2006.
- 29) 同上：p.10.
- 30) 同上：pp.25～26.
- 31) 同上：p.29.
- 32) 同上：p.162
- 33) 同上：pp.238～243.
- 34) 和田秀樹：新学問のすすめ，中経出版，2007.
- 35) 同上：p.1.
- 36) 同上：pp.31～36.

- 37) 石渡嶺司：最高学府はバカだらけ 全入時代の大学「崖っぷち」事情，光文社新書，2007.
- 38) 同上： pp. 52～55.
- 39) 同上： pp. 55～58.
- 40) 同上： pp. 84～88.
- 41) 畑島喜久生：いま日本の教育を考える，(株)リトル・ガリヴァー社，2007.
- 42) 同上： pp. 93～94.
- 43) 市川太一：30年後を展望する中規模大学 マネジメント | が学習支援 | 連携，東信堂，2007.
- 44) 同上： p. 4.
- 45) 同上： pp. 62～71.
- 46) 同上： pp. 213～214.
- 47) 船曳建夫：大学のエスノグラフィティ，有斐閣，2005.
- 48) 同上： pp. 5～6.
- 49) 同上： pp. 180～181.
- 50) 例えば，宇田道隆編著：科学者寺田寅彦，NHK ブックス，1975.
- 51) 山口憲一郎：教育をどう変えるのか，創風社出版，2006.
- 52) 同上： pp. 193～198.
- 53) O・F・ボルノウ（森 昭・岡田渥美訳）：教育を支えるもの，黎明書房，2006.
- 54) 同上： pp. 148～170.
- 55) 堀真一郎・滝内大三：教育の名言 すばらしい子どもたち，黎明書房，2006.
- 56) 同上： p. 254.
- 57) 同上： p. 84.
- 58) 文献34) 中， pp. 100～101.
- 59) 文献55) 中， pp. 113～114.
- 60) 山本満敏：教師は夢を語れなきゃ!!，鳥影社，2007.
- 61) 同上： pp. 176～178.